

国連用語に依存しない環境史叙述を求めて

藤原辰史

1 国連用語と環境史

歴史叙述の中で、自然と人間の相互影響関係という社会的・文化的現象をどのように描くべきか。この企画で考えたいこの問いは、日本でもここ数十年でようやく市民権を得つつある「環境史」というジャンルの変わらぬ課題であった。とくに、現在の COVID-19 の災厄に伴い、改めて環境史、とくに疫病の歴史が注目されていて、今後ますます環境史への注目は高まると推測される。それは、『ヨーロッパ帝国主義の謎』『史上最悪のインフルエンザ』の著者であるアルフレッド・W・クロスビーや、『鉄・病原菌・銃』のジャレット・ダイヤモンドだけではない。村上陽一郎、宮崎揚弘、脇村孝平、川越修、石弘之、飯島渉、速水融、香西豊子、山本太郎、服部伸、鈴木晃仁などの先駆的な研究が日本には存在し、この現状がいったい歴史的にどのような状況であるのかを知ったり、論じたりするうえで、少なくとも COVID-19 が生活を脅かしているいま、行きがかり上これに関わる雑文を書き散らしてきた私にはとても役立ち、多くの読者が私の引用した歴史研究者の言葉に学び、歴史書に手を伸ばしたことを、ここで申し添えておきたい¹⁾。

さて、ここに挙げられた2本の論文は、どちらも歴史の中の自然と人間の相互影響関係、もう少しわかりやすくいえば「人間と自然に対するケア」と「自然の人間に対する影響」の相互関係を扱っている。まったく異なったテーマを選んでいるが、環境史のポテンシャルを考えるヒントを与えてくれる。

「中・近世ドイツ都市における給水システム」と題された渡邊裕一論文は、ドイツの都市アウクスブルクの水供給システムについて扱い、「農業の女性化」と題された友松夕香論文では、アフリカの農業開発の文脈、とくに国連の諸組織の言説の中で「女性」がどのような位置づけにあるのかを扱っている。場所も、時代も、対象もまったく異なるこれら2本の論文には、しかしながら、ある共通の問題意識がつかぬかれている。では、この問題意識とは何か。

誤解を恐れず述べれば（そして自分への反省も込めていえば）、国連の問題設定に環境史の問題設定を依存しすぎないことである。すでに、私は、『現代思想』で「規則正しいレイプ」と地球の危機」という論考を執筆したが²⁾、ここでは「地球温暖化を避けるために二酸化炭素排出量を削減する」という、これ自体統計学的には正しい命題を、そのまま社会・経済・文化の文脈に

1) とくに、拙著「パンデミックを生きる指針——歴史研究のアプローチ——」（2020年4月2日に掲載。B面の岩波新書 <https://www.iwanamishinsho80.com/post/pandemic>）。
2) 拙著「規則正しいレイプ」と地球の危機』『現代思想』48巻5号、2020年3月。

落とすことの牧歌性について指摘した。環境問題をそもそも重視しない態度は論外にしても、本来は地球温暖化という現象から、化石燃料の使用やそれを全自動的に促す内燃機関や電気モーターの普及、さらには発電や農業の石油依存に至るまで、文明史的に遡らなければ、単に、いま進行しつつある地球規模の自然環境破壊を「二酸化炭素排出削減」という問題へと矮小化することに人文学が貢献してしまうことになることを恐れたからである。

たとえば、2015年9月25日から27日までニューヨークの国連本部で「国連持続可能な開発サミット」が開催され、そこで150を超える各国首脳が集まり、「我々の世界を変革する 持続可能な開発のための2030アジェンダ」が採択されたが、ここに掲げられた17の「持続可能な開発目標 (SDGs)」は、現在、国や地方政府だけではなく、企業もこれに対する支持を表明し、現代社会の困難を克服する指針として一定の定着を見せつつある。新聞の記事にはSDGsのロゴが掲げられ、バッジをつけている政治家や企業家もよく見るようになった。そこに掲げてあるのは、以下の通りである。

「1 貧困をなくそう」「2 飢餓をゼロに」「3 すべての人に健康と福祉を」「4 質の高い教育をみんなに」「5 ジェンダー平等を実現しよう」「6 安全な水とトイレを世界中に」「7 エネルギーをみんなにそしてクリーンに」「8 働きがいも経済成長も」「9 産業と技術革新の基盤をつくろう」「10 人や国の不平等をなくそう」「11 住み続けられるまちづくりを」「12 つくる責任 つかう責任」「13 気候変動に具体的な対策を」「14 海の豊かさを守ろう」「15 陸の豊かさを守ろう」「16 平和と公正をすべての人に」「17 パートナリシップで目標を達成しよう」

ほとんどの項目が、現在、多くの人に求められつつも実現されていないものであり、欠かせない論点を提示していることは否定できないだろう。歴史学研究もこのSDGsの実現に向けて、多くの史実を提供することもできようし、とりわけ17の項目のかなりを占める環境史の分野でも、SDGs的な発言は比較的多く見られる。実際、私もそのような発言を求められることが多い。

2 被害者の立場からの「環境」

だが、このような言葉が実際の農業や漁業や林業の現場で、あるいは、都市での生活や労働の現場でどこまで具象性を伴って届いているのか、もっと言えば、世界各地の環境汚染で肉親を奪われた人たちにどこまで切迫しているのか、このような問いから逃れることはやはりできない。日本には、膨大な公害研究や聞き書きの蓄積があるが、そこで論じられる言葉さえ現場とのズレと向き合い苦しんで書かれているのに、それらの研究と世界的な環境問題のモットーとの間にはそれとは比べものにならないほどのズレがもたらされている。

たとえば、緒方正人の声を聞いてみたい。水俣病で父親を亡くし、自分も患者として国やチソを相手に闘ってきた緒方は、途中で国家に対する患者認定申請を断った人物である。それは、金銭による解決を拒否し、国家への不信を徹底させ、自分の中の文明と闘うという選択であり、水俣病患者からも批判があった行動だった。その是非についてはここでは論じない。ただ、その彼が、ドイツの「日独環境学術会議」を旅行のついでに聴きに行ったときの回顧は、環境について何かしらの研究をして発言しようとする人間にとって重要なことを突きつけているので、ここで引用したい。

主な参加者は経済学、社会学、工学、環境学などの学者たちでした。あちらに進出してい

る日本企業や日本大使館が会議のスポンサーになっているので、そういうところからも代表が来て話をした。ちゃんと同時通訳つきで、金がかかっているようでした。話はほとんどがそれぞれの専門分野から出ない技術論。そしてほとんどが「調和のとれた経済発展」といった空虚な言葉を掲げて、要するに、環境問題はさらなる技術発展によって克服できる、という議論なんです。全体に呆れるほど楽観的なムードでした³⁾。

日本企業もパネル・ディスカッションに参加していて、そのひとつが昭和電工だった。新潟の阿賀野川流域で水俣病を起こした企業であることは言うまでもないだろう。緒方は、立ち上がり、なぜ一言も水俣病について発言をしないのだ、それに触れず「環境問題の解決策をあれこれ論じること」は「奇妙」ではないか、と発言をした⁴⁾。昭和電工のパネラーは沈黙したという。

先ほどのSDGsの楽観的かつ総花的な項目は、緒方の参加した「日独環境学会議」の「空虚さ」と無縁ではない。さらに、この「沈黙」から逃れることは、環境史研究者のみならず、歴史研究者は一般的に困難だろう。歴史研究の言葉が、どこまで当時の人間にとって空虚に響くのかについて悩まない歴史研究者はいないはずである。

さらにいえば、これまで繰り返し指摘されてきたように、ユネスコの世界遺産登録によって、世界各地の歴史的な遺産が、本来の保護対象としてではなく、観光資源として発掘され開発されていく事実も、緒方の感じた学術関係者の「空虚さ」と遠くない。そのとき、渡邊論文が指摘するように、負の歴史がきちんと後世に伝えられるのではなく、正の歴史がフレームアップされやすいからである。

この特集に掲載された論文は、いわゆる史料分析に基づいた歴史論文ではない。わかりやすい結論に陥りがちな言説を批判する、という問題発見的な歴史論文である。それは、2本の論文が、すでに日本でも進展しつつある近代西洋環境史の成果からすれば周縁領域を研究する論文であることも関係している。というのも、渡邊論文は中・近世の歴史研究の立場から近代西洋を土壌にした歴史観を逆照射して批判的に検討し、友松論文は現代アフリカの現場から近代西洋に登場した女性観をやはり見つめ直しているからである。西欧社会の現代史に親しみすぎた私にとっては、自分にはない視点をどちらも提供していて、刺激的であった。

環境史の原点へ

ここで私が述べる「わかりやすい結論」とは、誰もが受け入れやすいエコロジー的言説であったり、企業広告にも躍りやすい言葉であったり、道徳的に消化しやすいメッセージであったりする。社会史にとって「社会の調和」、経済史にとって「経済の発展」、政治史にとって「国際平和」、運動史にとって「社会の変革」がある種の隠された前提的価値となって史料収集がなされ、分析された歴史叙述がしばしば（もちろんすべての研究がそうではないが）トートロジーに陥るように、「地球環境の調和」という美しい言葉に研究のモチベーションが偏りがちな環境史が新しい脱皮を遂げていくためには、できるかぎりこの国連用語で語る環境史を意識的に遠ざけなければならぬだろう。

1960年代にアメリカを震源として始まった環境史は、歴史学の枠を超え、環境に関わる諸学を

3) 緒方正人(語り)、辻信一(編)『常世の船を漕ぎて』ゆっくり小文庫、2020年、271頁。

4) 同右、273頁。

統合するような学問的営みでもある。「新しい」というのは、人間以外の要素、たとえば、病原菌、昆虫、魚介類、作物、森林、土壌、海洋、沼沢、湖、食物のなどの分析を積極的に取り入れ、人間と自然の相互関係を基礎に捉え直すからだ。従来の歴史学でも、たとえばフェルナン・ブローデルの『地中海』(1949)に端的に見られるように、自然環境へのまなざしが弱かったわけではなかった。ただ環境史は、ブローデルらの先駆者のやり方を一部踏襲しつつも、基本的にはレイチェル・カーソンが『沈黙の春』(1962)で毒ガス由来の殺虫剤が環境を汚染していると告発したことに見られるような現代的な環境破壊の源流探し、人間の自然破壊もしくは自然保護の歴史という観点が濃厚なものであった。

日本でも主要書籍が訳されているJ・D・ヒューズやD・オースターは、アメリカ環境史の創始者である第一世代だが、人間中心主義から自然中心主義へと踏み出し、1930年代アメリカの土壌流出など具体的な出来事を研究したり、生態学史を自然と調和的な「牧歌的生態学」と管理的な「帝国主義的生態学」にわけて環境史を叙述したり、従来の歴史学があまり注目してこなかったテーマを掘り起こし、それぞれの環境史の理論について書籍化した(ヒューズ『環境史入門』(2016)、オースター『ネイチャーズ・エコノミー』(1977))⁵⁾。

彼らの試み、すなわち、人間以外の対象が歴史叙述にダイナミックに登場する試みは、『沈黙の春』や酸性雨や熱帯雨林の破壊や公害の深刻化など環境問題が新しい国際問題として重視される中で、一定の影響力をもち続けた。第一世代の開拓した領域は広く、今なお、第二世代に位置する論文執筆者や私にも深い影響を与え続けている。

しかしながら、アメリカの環境史創設者たちに根強く存在した「環境破壊をする側=悪、保護する側=善」という「わかりやすい」図式と「人間が守るべき崇高なる自然」という、「広く受け入れやすい」倫理的・思想的前提は、いまなお強固なものとして残っている。それはたとえば、排水をきれいにしようとするあまり、栄養が少なくなっている種類の魚の漁獲高が減った瀬戸内海の事例や、保護しすぎることである種類の動物が増えすぎて環境が破壊される事例、あるいは、ダイナマイト漁でしか生活できない東南アジアの漁民たちを環境破壊者として批判することの机上の空論的状況⁶⁾を、説明することができない。

渡邊論文の試みは、まさに、都市と農村という従来から根強く存在した二項対立ではなく、そのどちらをもつらぬく「水」から描く都市の環境史を目指すものである。古代から近代にかけて1500年の間に発展がなかったと言われていたアウクスブルクの水供給システムが、実は、恵まれた環境(2本の川と湧水)と優れた技術によって生み出されたことは繰り返し指摘されてきたし、それは古代と近代を称賛して中世・近世を停滞期と批判するある種の発展史観を批判するものであった。さらに2019年にユネスコ世界遺産に登録されたことで中・近世のアウクスブルクの水管理の歴史はにわかに活気づいたのだが、そこには重大な論点が抜け落ちていく。渡邊によればそれは水をめぐる社会的分断である。上流階級は、私邸に飲料水を引くことができ、富裕層が多く住む都市中心部では6割ほどの過程と水道の接続がなされていたが、そうではない中下層民が住

5) ドナルド・オースター『ネイチャーズ・エコノミー——エコロジー思想史——』中山茂・成定薫・吉田忠訳、リプロポート、1989年。ドナルド・ヒューズ『世界の環境の歴史——生命共同体における人間の役割——』奥田暁子・あべのぞみ訳、明石書店、2004年。ドナルド・ヒューズ『環境史入門』村山聡・中村博子訳、岩波書店、2018年。

6) 赤嶺淳『ナマコを歩く——現場から考える生物多様性と文化多様性——』新泉社、2010年。

む街区は、2割程度にとどまった、という。環境保護の恩恵を被るのは誰か。環境史の研究から社会階層や階級へのまなざしを失ったとき、同質な人間集団を想定しやすくなる。

また、友松論文は、アフリカ農村での女性の活躍を支援する国連食糧農業機関や、一部の西欧のフェミニズムの理論家たちが、しばしば、アフリカの現場で男性によって支配されている女性が主体的に農業に取り組めるために、きちんと土地を持ってそこで耕作できるような環境づくりを提案するその言説を分析していく。それ自体まったく正しいように思える提案が、女性にはすでに農地の耕作のみならず、毎日の水汲み、料理、家のケアなど多くのシャドーワークがのしかかっていることを無視したものになっている、と批判する。さらに、女性は、男性と異なり自然と近い立場にあり、自然のケアにふさわしい性質がある、という言説が、ただでさえ忙しく、負担の多い女性に環境保護の担い手までも押し付けるような役割を果たしてしまっていることも指摘する。「農業の女性化」という聞き慣れない言葉に友松が込めた意味は、おそらく、「女性的なるもの」の本質化がはらむ危険性であろう。そしてさらに強調しなければならないのは、現場もまたそういった言説に同意しながら、自分で自分の首を締めるような状況に陥っていることだ。友松は（論文中では述べていないが）、以前、アフリカで活動する国際的な援助組織ではたらいっていた経験があり、その現場で体験した目線が論文の最初から最後までつらぬかれていることは、やはり強調しておきたい。

詳しい内容を展開することはここでは避けるが、国連的な環境保護・文化財保護の流れを批判するこれらの論文は、すくなくとも環境史の叙述が陥りがちな用語、「サステイナブル」（現代の経済的不平等を見過ごした「サステイナブル」は単なる「現状維持」に過ぎない）や「MOTTA IN A I」（いまは日本では毎日新聞社によって商品登録され、グッズまで売れている）などから適度に距離をとり、人間と自然との相互作用の場が実際にどうだったのかを冷静に研究し、叙述するために、欠かせない視座を提供してくれている。

環境史の原点とは、ちょうど、群集劇を描くシナリオのように、場における力のやりとりを描く技法である。生物だけではなく非生物も、人間だけではなく動植物も、調和だけでなく分断も、持続だけでなく断絶も、友好だけではなく敵対も、できうるかぎりの不調和が、当然ここには含まれなければならない。環境史の可能性が、それが担う重圧と同じくらい大きく開かれつつあるいま、このような点検をしておくことは、今後の歴史学の発展のためにも、けっして無意味ではないと私は考える。

（京都大学准教授）